

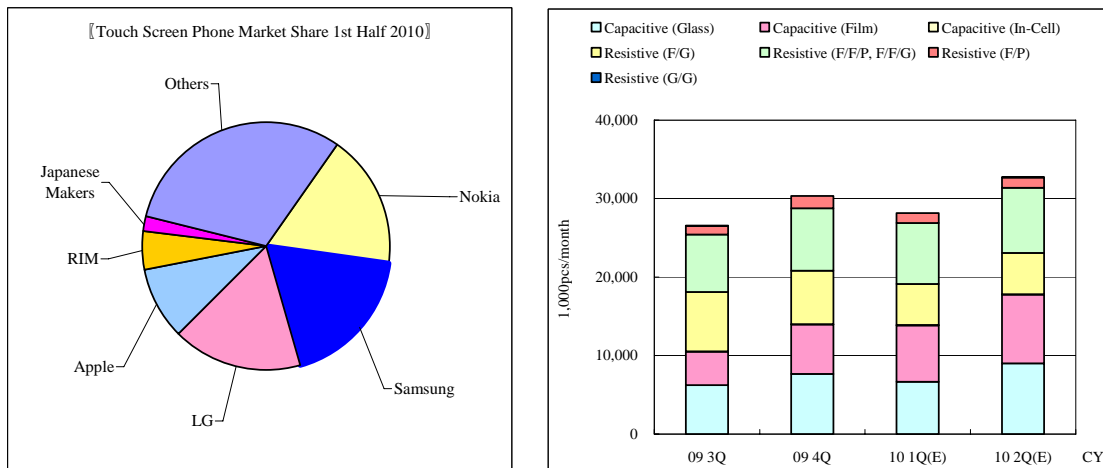
TSR - Press Release

タッチパネル搭載携帯電話の市場調査分析結果を発表

～ スマートフォンの立ち上がりによって、2010年上半期（2010年1-6月期）のタッチパネル搭載携帯電話は1億8千万台まで拡大！～

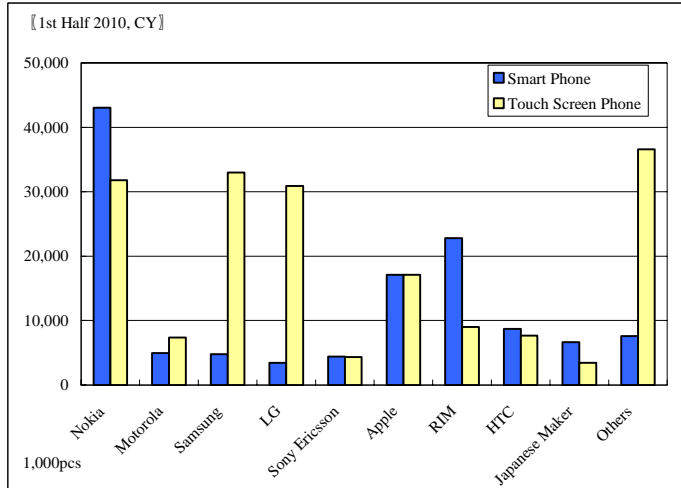
株式会社 テクノ・システム・リサーチは、携帯電話向けタッチパネルの市場分析調査結果を発表しました。

Apple「iPhone」に代表されるスマートフォン需要を背景に、2010年上半期(2010年1-6月期)のタッチパネル搭載率は約1億8千万台(対前年比47%増)まで拡大し、タッチパネルの搭載率も26.4%まで上昇する見込みである。



タッチパネル搭載モデルはWindows Mobileを中心にビジネス向け端末と、中国市場などの漢語圏におけるフルタッチデザインに限られていたが、Apple「i-Phone」の登場により市場は一変した。SamsungやLGは北米を中心にフルタッチデザイン端末を投入しAppleを追随し、タッチパネル搭載モデルを増加させた。続いて、Nokia, Motorola, Sony Ericsson, RIMなどもフルタッチデザインへの対応をおこないタッチパネル搭載率を上昇させている。

そして、新モデルの多くがフルタッチデザインを採用したスマートフォン(汎用OS)モデルであり、スマートフォン=フルタッチデザインという認識が広まっている。



しかしながら、左図のとおりスマートフォンとタッチパネル搭載には誤差が生じている。スマートフォンはPC系OS: Windows Mobile, Apple OS, Linux Base OS (Android, etc)と、Symbian, Black Berry OS, Palm OSなどを含めたものである。SamsungやLG、中華系のタッチパネル搭載モデルの多くが自社独自OSを採用しており、タッチパネル搭載数に比べ、Smart Phone生産数が少なくな

っている。一方、NokiaやRIMではSmart Phone対応モデルでもタッチパネル搭載モデルが少ない。これらのギャップは製品が過渡期であることやスマートフォンの定義に一貫性がないことから生じるものである。SamsungやLGではフルタッチデザイン端末のスマートフォン対応化を行っており、スマートフォンとタッチパネルのギャップは軽減されていく見込である。

タッチパネル方式は抵抗膜方式が主流であったものの、2009年から静電容量式への移行が急速に進んでいる。点認識が優れる抵抗膜式に比べ静電容量は面での認識が優れている為、静電容量方式は文字入力に難があったものの、スライド入力方式等のインターフェイスが向上している。また、供給ベンダーの増加により、静電容量式タッチパネルコストが下落しており、メーカーサイドでは採用しやすい状況となっている。特に、2010年のタッチパネル搭載モデルのほとんどが静電容量方式を採用しており、静電容量方式がさらに拡大する見込である。

なお、本リリースに関する調査内容は「Touch Screen Market Breakdown of Mobile Phone 2nd Half 2009 & 2nd Half 2010 Forecast」に掲載しております。

【リリース及び資料のお問い合わせ先】

株式会社 テクノ・システム・リサーチ

第2グループ 武花 勇一 (takehana@t-s-r.co.jp)

Tel: 03-3866-4505